

北海道医歌人会詠草



春の楚音

函館 水関 清

早春の 陽をなみなみと蓄えて 福寿草揺れ光を零す
雪消えし大地の瑞苗 水芭蕉 春の湖畔は歌うがごとし
旅立ちを真近に控えし幼鳥の 足取り確か 大沼の春
満開の桜を つばみに戻しつつ 新幹線は北へ走れり
そこだけに川魚たちの気配あり ライズリングの 波の広がり

友

旭川 稲積 文子

それへに見習うことの多き友 輝く青春の過去は続きて
風受けて裸木は動かさず葉を持ってば 無言なれども動き異なる
謎めいた不安な世界にさそいつつ 曼珠沙華は一面に咲く
咲き誇る曼珠沙華の原の中 ポツリポツリと人影動く
吾が住める街に山茶花などはありません 赤き花包む緑の街道

雪が降る

江別 三宅 浩次

さつばろの雪まつりの日の賑わいに叶えるように雪が降る
北陸の遠き地にも雪が降る 湿度気多き重い雪とが
風あれば雪舞い上がり視界ゼロこれ北国の一風物か
しんしんと雪降る音をなぞらえる違和感なしに受け入れている
窓外の雪を眺めつわが家の薪ストーブに古材をくべる

春を待つ

札幌 古屋 統

桜辛夷一度に開く明るさやその他もろもろ春ぞ待たる、
乙女らがロングコートの襟立てて唇固くりラ冷えを待つ
バラ香るベンチの夕べ思う人思はれ人抱く夏の待たる、
九十歳過ぎたる此の身ガタ多し咳に胸水疑がん細胞も
九十年良く働きし蜂にして蜂も老ゆれば先細りつつ

アラギリ

札幌 浜島 泉

アラギリの咲く丘の墓海望む 雨の上がりし休日の朝
病棟のひひなの前に車いす 表情かたく作り物めく
雪崩にて遭難の報 我もまた亀裂踏み抜く恐怖の記憶
ペテランの案内を得てトラバース 雪崩の安否ことわりにけり
生涯にひとたび限り 数秒の目撃なりき太陽光柱

樹木画

釧路 兎玉 昌彦

がん病みて命定まり自らの人生うつす最後の樹木画
切り株にひこばえ 小枝に実もたわわ樹木画に見る時代への夢
世代から世代へ渡すメッセージに人生まつとうせんや
占いに未来夢みるおなごらと人生勝負に賭けるおのこら
競い合いあらがいつつも助け合うその背反が生きるといふこと

妻の入院

北広島 古屋雅三知

妻病みて 余儀なくされし 入院に にわかのお男 所帯となりぬ
日々のこと 何も分からず 頼りしは 妻のメールと 覚書のみ
常日頃 動かざる子が 我よりも 炊事洗濯 器用にこなす
子ら二人 男おとこなれども 日頃より 自立させむの 妻の教育
年末の 準備も何も 無かりせば 賀状の果ても 年越しとなる